



Data

監督・脚本：テンギズ・アブラゼ
 出演：アフタンディル・マハラゼ /
 イア・ニニゼ / メラブ・ニニ
 ゼ / ゼイナブ・ボソヴァゼ /
 ケテヴァン・アブラゼ / エデ
 イシエル・ギオルゴピアニ /
 カヒ・カフサゼ / ニノ・ザカ
 リアゼ

👁️👁️ みどころ

北京五輪開会式の日が発生した南オセチア紛争によって、グルジアは急に有名になったが、そんな時1984年製作のグルジア映画の名作が日本で大公開！ペレストロイカの象徴として絶賛されたこの映画は、あの時代の肅清の姿を描く痛ましいもの。しかし、その中にタイトルを超えた希望と再生の芽も。2時間33分の間じっくりと腰を据えてあの時代の悲劇を味わい、かつ学習したい。



タイムリーにすごいグルジア映画を

2008年8月8日の北京オリンピックの開会式と同じ日に、グルジアで大事件が発生した。すなわち、親欧米寄りのサアカシュヴィリ大統領率いるグルジアが、親ロシア派で事実上独立状態にあった南オセチア自治州に侵攻したことによって、グルジアVSロシアの南オセチア紛争が勃発したのだ。ロシア軍の反攻によってグルジア軍は2日後に撤退したが、ロシアによるグルジア全土への空爆、グルジアでの戒厳令の発布と「戦時状態」宣言によって、事実上の戦争状態となった。8月15、16日の和平合意文書の調印によって戦争状態は一応終結したが、これを契機としてロシアは8月26日南オセチア自治州とアブハジア自治共和国の独立を承認し、逆にグルジアは8月29日ロシアとの国交を断絶したため、グルジア情勢はなお緊迫下にある。

そんなタイムリーな時期に、たまたま広島への出張が変更になったため、こんなすごいグルジア映画を観ることができたのはラッキー。

この作品の評論を本格的に書き始めたら、膨大な量になってしまうこと確実。もちろん、

時間があればいくらでも書きたいが、昨今は時間的に詰まっているため、感じたことのエッセンスだけを記すことによって、この映画の私なりの評論としたい。

誰が製作？いつ製作？

この映画を監督したテンギズ・アブラゼは、1924年にソ連邦グルジア共和国で生まれ、グルジア映画の戦後の発展を担ってきた代表的監督。そして、『祈り』（69年）『希望の樹』（77年）に続いて1984年に製作した『懺悔』が「懺悔」三部作として有名で、1994年に亡くなったとのこと。

ロシアは今、プーチン大統領の跡を継いだメドベージェフ大統領がプーチン首相との二頭体制の下、米中とはもとより、EUとの関係でも微妙な関係を続けているが、それもこれも第2次世界大戦後に生まれた「米ソ冷戦構造」が、1991年のソ連邦の崩壊によって大きく変化したことによって生まれたもの。今でこそ歴史的事実となったが、1985年のゴルバチョフ書記長の誕生とその後のペレストロイカの展開は、当時としては驚きの連続だった。

この映画のプレスシートを読んでではじめて知ったのは、ゴルバチョフ書記長によってソ連邦の政治局員、外相に抜擢された、私でもその名前を知っているシェヴァルナゼは1972年からグルジア共産党の第一書記をしていたこと。つまり、その頃のグルジアは、まさにソ連邦と一体。この映画はそんな時代状況下でつくられたわけだ。

2時間33分の長丁場だが

グルジアの架空都市で展開される物語は難しそう。そのうえ、やっと日本で公開された映画は何と2時間33分という長丁場。体力と気力がもつだろうかと心配したが、結果的にはそんな心配は無用。登場人物のキャラは明確だし、ストーリー展開もわかりやすいから、テーマは重いもののその展開についていくことは十分可能。

したがって、2時間33分と聞くだけで尻込みせず、じっくり鑑賞したい。

1人2役の熱演に注目！

この映画でもものすごい存在感を示しているのは、『チャップリンの独裁者』（40年）と似たような独裁者の雰囲気を出し出す、市長のヴァルラムを演ずるアフタンディル・マハラゼ。もっとも、この映画はヴァルラム市長が死亡したことを報じる新聞記事を、ケーキをつくっている中年女性ケテヴァン・バラテリ（ゼイナブ・ボツヴァゼ）が知るところから始まるから、当初登場するのはアフタンディル・マハラゼが1人2役を演ずるヴァルラムの息子のアベル。もっとも、死んでしまったヴァルラムは埋葬された後、ケテヴァンの手によって3度も掘り返されるから、ひょっとしてこの死体役もアフタンディル・マハラゼ・・・？

それはともかく、市長として独裁的な権勢を誇ったヴァルラムは『チャップリンの独裁者』でチャップリンがみせたヒトラーそっくりの演説や道化じみた大芝居が大得意のうえ、すばらしい歌の才能をみせるから、それに注目！

他方、ヴァルラムの埋葬に立ち会ったアベルは、その墓を掘り起こしたケテヴァンの裁判の中で、潔癖な心情を持つ息子トルニケ（メラブ・ニニゼ）からの思わぬ反乱（？）にタジタジとなり、ヴァルラムの息子として、同時にトルニケの父親として、さまざまな苦悩を背負い込んでしまうから大変。こんな難しい2役を1人で演じたアフタンディル・マハラゼの熱演に注目！

私が8歳の時に・・・

ヴァルラムの墓を3度にわたって掘り返していたのが発見されたことによって、逮捕され起訴されたのはケテヴァン。映画の冒頭、馴れた手つきで教会をかたどったケーキをつくっていた女性だ。「素晴らしい人が亡くなった」と語る男から、ヴァルラムの死亡を報じる新聞記事を見せられてきっと何かを感じ、こんな行動に及んだのだろう。

ケテヴァンは今被告人として法廷に立っていた。とはいっても、この法廷はあえて時代的検証を無視した独創的なもので、被告人のケテヴァンは美しく着飾っており、その発言もかなり自由。私は大学時代に市川正一の『日本共産党闘争小史』を読んだが、これは法廷で認められた被告人陳述によって、日本共産党の正当性を主張しようと意図したもの。「私が8歳の時にヴァルラムは市長になりました・・・」と語り始めるケテヴァンの封印された過去は、この市川陳述と同じように衝撃的なもの。つまりそれは、市長に就任したヴァルラムが、画家であったケテヴァンの父親サンドロ（エディシェル・ギオルゴビアニ）と美しい母親ニノ（ケテヴァン・アブラゼ）をはじめとする多くの市民に対して下してきた数々の暴虐ぶり＝肅清を告発するものだった。

2時間33分のこの映画は中盤の2時間弱が、それをもたらしたヴァルラムの暴虐ぶりをケテヴァンが語るバラテリ家の悲劇の回想シーンとなる。これが、ソ連邦の一員であったグルジアのとある地方都市で、あの時代に展開されていた歴史的な事実なのだ。戦後63年間、アメリカ流の自由と民主主義の恩恵を享受してきた日本人にはなかなか理解できないうえ、今でも北朝鮮ではきっと存在しているはずの独裁国家の下で必然的に起きる悲劇が、法廷におけるケテヴァンの陳述によって赤裸々に・・・。

責任能力なし＝無罪の議論がこの法廷でも

構成要件該当性、違法性、有責性という3つの要件を満たさなければ罪とならないことは、近代刑法の大原則。ここで言う有責性には故意・過失という責任論の他、精神病などで自分の行為の是非を分別できないため責任能力のない場合は無罪になるという議論が含まれている。

私が弁護士としてケテヴァンの法廷シーンを見ていて面白かったのは、審理のラスト近くになって被告人の再度の精神鑑定の請求 責任能力なし 無罪の主張が出されること。もっとも、これは無罪とすることが目的ではなく、精神病という鑑定結果を得ることによって、ケテヴァンを精神病院に監禁してしまうことが目的のようだったが・・・。

刑法理論の難しいことはわからなくても、そんな論点があることくらいは、昨今心神喪失＝無罪の事案が問題となっていることと対比して勉強した方がいいのでは？

丸太に刻まれた名前の意味は？

ソ連におけるスターリンの粛清の激しさは有名だが、ヴァルラム市長の粛清ぶりも相当なもの。当初サンドロがヴァルラムから嫌われた理由は、老朽化した教会の修復を申請したこと、サンドロがヴァルラムの演説を真剣に聴かなかったこと、サンドロの妻ニノがすごく美しかったこと。今公開されている『レッドクリフ』(08年)では、魏の曹操が呉へ攻め入ったのは、呉の周瑜の妻小喬への横恋慕のためだったことを考えると、なるほど、ヴァルラムのサンドロに対する粛清の理由の1つがそれだったとしても不思議ではない・・・？

それはともかく、長い間続くヴァルラムによる粛清の嵐の中で印象的なシーンは、丸太が駅に到着したと聞いたニノが娘のケテヴァンと共に駅に駆けつけるところ。残念ながらニノは、積み上げられた丸太の中にサンドロと記された文字を発見することはできなかったが、そこで展開される1人の老女が泣きながら丸太に書かれた文字をなぞっているシーンは涙を誘う。つまり、ヴァルラムの粛清によって遠い遠い流刑地で強制労働に従事している罪人たちは、せめて丸太に自分の名前や場所を刻むことによって、身内へのメッセージにしようとしていたわけだ。

あの時代のソ連にはそんな悲惨な現実があったことをしっかり認識しなければ。

トルニケの行動が焦点に

長い長いケテヴァンの告白と告発の締めくくりは、「人並に葬れば、ヴァルラムの罪を許すこととなります。すべての無実の犠牲者の名において、遺族が遺体を掘り返すことを要求します」というもの。それに対しては、アベルはじめ多くの傍聴人がケテヴァンを非難したが、アベルの息子でありヴァルラムの孫に当たるトルニケだけは、ケテヴァンの告発に動揺し、ヴァルラムの罪を謝罪すべきだとアベルに主張し始めたから、次第にアラヴィゼ家は面倒なことに。

トルニケがそう感じたのは思春期特有の潔癖さのせいだが、それを真っ向から否定し反論する父親アベルに対して、トルニケが反発したのは当然。その結果、アラヴィゼ家に起きた不幸とは？それは、ここでは書かないでおこう。そしてまた、その後に起きるアベルのアッと驚く行動も。なぜなら、それはあなた自身の目でしっかり味わってもらいたいから

ら。きっちり2時間33分の間スクリーンに向かった者だけが、そんなラストを味わう資格があるはずだ。



(C) Georgia-Film, 1984

もう1つのクライマックスも・・・

アネタばれ覚悟で1つだけ書いておきたいのは、実はこの映画にはもう1つのクライマックスがあること。この映画のタイトル『懺悔』は、ヴァルラム市長の息子アベルの気持を象徴するものだが、何度でも死者の墓を暴くというケテヴァンの行為はホントに正当？ また、ヴァルラムによる粛清の罪を、息子のアベルや孫のトルニケがずっと引き継がなければならぬの？

世の中にはたくさんの復讐物語があるが、そこで導かれる結論は復讐を達成してもホントの満足感は得られないということ。そう考えると、ケテヴァンの死者の墓を暴くという行動と裁判でケテヴァンが一貫して主張していることにも、若干の疑問が生じてくるはずだ。

さあ、そんなことを考えながら、テンギズ・アブラゼ監督が描く、もう1つのクライマックスをじっくりと。

2008(平成20)年11月11日記